発問例

●二三七ページ

問 **「僕」が別れたガールフレンドに電話をかけたのはなぜか。**

答 友人が誰もつかまらず、どうしても青のことを尋ねたかったからということもあるが、彼女と別れたことを後悔しているのかもしれず、まだ彼女に気持ちが残っていたから。

補 ハワイの写真をまだ持っていたことや、一九九九年の大晦日の夜なのにひとりでいることなどに着目し、その状況の背景として、彼女の存在が大きい点を確認したい。

問 **彼女の部屋の様子から、「僕」はどのような気持ちになったものと考えられるか。**

答 知らない男が電話に出たことや、人々がパーティーで集まっていて自分の状況とは正反対の賑やかさだったことなどから、彼女との間に出来た遠い距離を感じている。

問 **⊙「半分喧嘩腰で言った。」（8行目）とあるが、なぜか。**

答 少し前に喧嘩別れした「僕」から、ミレニアムを迎える楽しいパーティーの最中に水をさすような話をされ、腹が立ったから。

●二三八ページ

問 **電話での彼女の口調から、「僕」に対する彼女のどのような気持ちが読み取れるか。**

答 もう「僕」に興味はなく、電話も迷惑であるという、あからさまな拒絶の気持ち。

補 「僕」にとって近しい存在であったがゆえに、彼女なら気づくはずだ、あるいは、青の消滅について共有したいという思いがあったのかもしれない。「僕」と彼女との懸隔を確認したい。

語句の研究

●二三七ページ

2 僕のガールフレンド　別れたガールフレンドと言いながら、ここでは「僕の」と二度も反復している。喧嘩別れしたとは言いつつ、やはり心のどこかで彼女とのつながりを求めているのではなかろうか。確かに恋人という表現はないのだが、一緒にハワイ旅行までした関係は、「僕」の心身に忘れがたい記憶を形成していたはずである。

キー・ポイント　僕のガールフレンドの部屋では賑やかなパーティーが繰り広げられているようだった。　電話先の彼女の部屋の様子であるが、これは「僕」に強烈な印象を残したはずである。「僕」がひとりぼっちでいなければならなくなった原因は彼女との喧嘩にあったわけであるが、当の彼女は、「僕」とはもう別れて無関係になったと考えていることがここではっきりしたことになる。電話に出た見知らぬ男、賑やかに盛り上がっているパーティーの様子。それだけで、「僕」の現在の状態とはまるで正反対である。「僕」は落ち込んでいるのに、彼女の方はもう気持ちの整理をとっくにつけていると「僕」には痛切に感じられたはずだ。彼女の第一声の「半分喧嘩腰」は、「僕」にとっては自分の孤独を否応無しに嚙みしめさせるものであっただろう。

16 今日は二十世紀最後の夜なのよ。　彼女は「僕」の周囲の人々を代表する存在でもあるだろう。新しい世紀を迎えることに夢中になっている人々の気持ちを、彼女の台詞はまさしく代表している。なぜこんな時に楽しもうとしないのか、今楽しまない者は馬鹿だと言わんばかりの態度である。別の面では、「僕」へのかつての気持ちなど自分には少しも残っていないということを「僕」に表明している台詞でもある。そして、そのことを「僕」は沈黙したまま受け入れざるを得ない。ここで、彼女と青の近接性が断たれていくことに注意したい。

注意する語句

（＊で用例を示した）

喧嘩腰…喧嘩をしかけようとするような居丈高な態度。
＊間違いを指摘すると、相手は喧嘩腰で反論してきた。

辛気臭い…思うに任せず、くさくさした気分である。気がめいって、どうにもやりきれない気分である。
＊ひたすら荷物整理ばかりで、なんと辛気臭い仕事だろう。

目一杯…はかりの目盛がいっぱいであること。転じて、最高限度にいたっているさま。
＊目一杯、仕事に励む。

ロクでもない…何の値打ちもなく、無意味である。くだらない。
＊ロクでもない話を信じてはいけない。

水をさす…うまくいっているのに、邪魔をして不調にする。
＊楽しんでいるのに、詰まらない話で水をさすことはないだろう。